

『アーサー・ラザフォード氏の遅すぎる初恋 番外編』

著：名倉和希

ill：逆月酒乱

♪ アーサー

私の恋人はなんて愛らしいのだろう。乱れたシーツに溺れるようにして横たわり、ちいさな横顔をこちらに向けている。閉じられたまぶたが開けば、漆黒の美しい瞳が現れるのを知っているが、いまは深い眠りの底に落ちているようだ。

ほんのすこし動かしたカーテンの隙間から陽光が差している。昨日、私の恋人になったばかりの時広は、目元に荒淫の名残をこびりつかせていた。

「トキ……」

そっと名前を囁いてみたが、時広はぴくりとも動かなかった。それほど疲れさせたらしい。時広にとっては、おそらくはじめてのセックスだったと思うから、何度も欲しがってしまって申し訳なかった。それほど素晴らしいセックスだったのだ。時広は健気にも私の愛情と欲望のすべてを受け入れようと懸命になってくれた。

自分で言うのもなんだが、私はかなりモテる方だ。ティーンのころからいままで、夜の相手に困ったことはなかった。それなりの経験を積んできて、それなりのテクニックを持っていると自負している。そんな私が夢中になって時広の体を貪ってしまったわけだ。私を感じるのとおなじだけ、時広も快感を得ていたようだから、それだけは良かったと思う。

横臥している時広の華奢な肩から背中にかけてが、露わになっている。肩甲骨がつくる影はとても芸術的で、自分に絵心がないのを残念に思った。この美しいいきものを絵に描くことができたなら、なんて感動的なことだろう。

下半身はシルクのケットの中に隠れてしまっているので、私は時広の安眠を妨害しないようにめくった。

片手で掴めてしまいそうな、ちいさな尻が見えた。その奥にある快樂の泉に、私は昨夜、おのれの欲望を埋めこんだのだ。埋めただけでなく、何度も出し入れし、何度も体液を放った。出し過ぎてどろどろになったそこをバスルームで洗ったのも、私だ。

時広は恥ずかしがって嫌がったが、きれいに洗うのは出した者の義務だと説得しておとなしくさせた。私が丁寧に解して快樂を教えこんだ窄まりは、体液をかきだすために挿入した指をきゅっと淫らに締めつけてきて、いけない行為に誘った。時広には自覚がないようだったが、あれはあきらかに誘っていた。

私は誘惑に勝てなかった。まんまと負けて、バスルームでまた時広を抱いてしまった。時広はびっくりしていたが、すぐに私に抱きついて可愛らしくあんあんと鳴いたのだ。

「ああ、トキ……」

つらつらと思い出していたら股間が熱くなってきてしまった。こんなに際限なく欲情したのは十代の頃以来だ。私はいったいどうしてしまったのだろう。どこかの回路がいかれてしまったとしか思えない。昨夜、あんなにセックスしたのに、もうしたくなるなんて。いい年をした大人のはずが――。

もしかして、これが恋に溺れているという状態だろうか。

「なんてことだ……」

私は時広の尻をケットで覆い、静かに頭を抱えた。

昨日、角野大智に指摘されたように、自分にとって時広は初恋なのかもしれない。こんな気持ちになったのははじめてなのだから、もう確定ということか。

認めたくない。断じて認めたくない。この私が、三十歳にもなって初恋を経験したなどと、絶対に認めたくない。だが、本当らしい――。

これは隠さなければ。人に知られたら恥ずかしすぎる。まあ、言わなければわかるまい。

「んー……………」

時広がかすかに呻きながら動いた。起きるのか？ 起きたらまず自分を見てもらおうと、時広の顔を向けている方に自分の体を傾ける。ゆっくりと時広のまぶたが上がり、黒い瞳が私をうつした。

まだ寝ぼけているのか、時広はぼうっとしたまま私と目を合わせている。昨夜はあれほど快感に蕩けた色に染まっていた瞳なのに、何事もなかったかのように無垢な黒い瞳に戻っていた。やがて何度かまばたきしたあと、ふっと視線を外した。ゆっくりと耳が赤くなっていく。どうやら照れているようだ。なんて可愛いんだろう。

『おはよう、トキ』

『……おはよう…ございます』

日本語で朝の挨拶をしたら時広も返してくれたが、その声は掠れていた。昨夜、私が喘がせ過ぎたせいだろう。時広は喉を手で押さえ、困惑している。痛みを発しているのかもしれない。

私はベッドサイドに置いてあるペットボトルを取り、一口含んだ。飲みこまずにそのまま時広の唇にキスをする。手で時広の顎を上げさせて、水を流し込む。こんなことをされたのははじめてなのか、時広は目を白黒させて驚いていた。それでもちゃんと飲みこんでくれるから可愛くてたまらないのだ。

「もっとあげようか」

時広が頷くから、私は何度か口移しで水を飲ませた。ふう、と息をついて、完全に目を覚ました時広は、あらためて私を見つめてくる。しだいにうっとりとした瞳が潤んできた。昨夜の愛の時間を思い出している証だ。

「トキ、私の顔になにかついているか？」

からかう口調で尋ねてみると、時広は目元をほんのりと赤くした。

『カッコよすぎて困るな……』

日本語でそう呟いた。私には意味がわからない。カッコヨスギテコマルとはどういう意味だろ

うか。あとでエミーに聞いてみよう。たぶん悪い意味ではないだろうが気になる。

「もう昼近い時間なんだが、なにか食べるか？」

「えっ、昼？　アーサー、仕事はどうしたんですか」

「休みにしてもらったよ」

「いきなりそんなことをして、大丈夫なんですか？」

「大丈夫。私の秘書は有能だから心配はない」

突然休暇を取れば、当然のごとく仕事は滞るだろう。だがエミーはすべてを適切に処理してくれる。その能力は買っているから心配はしていない。

ただ、理由が理由だからあとで借りを返さなくてはならない。なにを要求してくるかはわからないが、時広とのはじめての朝をこうしてまったりと過ごすためなのだ、多少の犠牲はやむを得ない。なにか高額なプレゼントを求められても、そのくらいですめば私は構わないと思っている。

翌朝のこんなに可愛らしい時広を見ずに仕事に行かなくて良かったと、いまつくづくと自分の選択が正しかったと確認しているところだ。

「あの……すこし、お腹が空きました……」

「なにか軽いものを頼もう」

私は時広の頬に軽くキスをしてからベッドルームを出た。リビングの内線電話でフロントにルームサービスを頼む。スープとパン、温野菜のサラダとミルク、自分用にコーヒーをオーダーした。

私は素肌にガウンを羽織っただけだが、ラフな部屋着に替えるかどうかしばし迷う。今日はこのまま部屋から出ることなく時広とまったり過ごしたいと思っている。着替えなくてもいいかなと考えていたら、背後でずるっとなにかを引きずる音がした。

「トキ……！」

全裸にシルクのケットを身にまとった時広は、壁に手をついて立っていた。ずるずると引きずっているから動きにくいだけでなく、たぶん後ろに違和感があって歩きにくいのだろう。倒れてしまいそうに見え、私は慌てて手を差し伸べた。そのまま抱き上げてソファへと運ぶ。

「トキ、痛むか？」

どこが、とは口にしなかったが、時広にはわかったようだ。頬を赤く染めて、時広は左右にふるふると首を振った。

「痛くは、ないです。ただ、腰から下に力が入らないだけで……」

「ちょっと見せてみる」

「えっ？」

「昨夜、寝る前に洗ったとき、切れてはいないようだったが、腫れているかもしれない」

私はソファに座らせた時広からシルクのケットを剥ぎとり、両脚を開かせた。じたばたと暴れはじめた時広の足首を掴み、「こら、私を蹴るつもりか」と叱ると、抵抗が止む。そのかわり、時広の両手が股間を隠すようにして下ろされた。

「それでは見えないだろう」

「見なくいいですっ」

時広の顔はいまや真っ赤に染まっている。恥ずかしがっている様子が新鮮だ。いままでの相手はセックスに慣れた男ばかりだったから、股間は自慢すべき場所であって、いまさら恥じ入るような場所ではなかったのだろう。わりと堂々と見せつけるようにして足を開く輩ばかりだった。

「君の手足を拘束して、無理やり診察する方法もあるが、そっちの方がいいのか？」

「い、いや…です」

「だったら、ほら、手を退けなさい」

すこし強めに命じてみたら、時広はぐっと唇を引き結び、真っ赤になったまま手を離した。指先が震えているところを見ると、演技ではない。本気で羞恥をこらえているのだ。

なんて素晴らしい。清純でありながら淫靡。昨夜も泣きながらもっととしがみついてくるギャップに燃えた。抑えたはずの情熱が、腹の底からぐぐっとこみ上げてくるのを感じる。

私は時広の股間をガン見した。昨夜、私を何度も受け入れたところは、赤くぽってりと色づいていたが、腫れているというほどではない。

昨夜、アナルセックスを経験させる前はしっかりと窄まり、こんな色をしていなかった。私が変わったのだと思うと、もう、そこに触れたくてたまらない欲望が湧いてきた。

時広が制止するまえにと、私はそこに顔を近づける。舌を伸ばして味見とばかりに舐めた。

「ひゃっ」

時広が変な悲鳴を上げて唾然と見下ろしてくる。私は構わずに、そこをべろべろと舐めた。

「あっ、やだ、アーサーっ」

慌てて時広が逃げようとするが、許すはずがない。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>